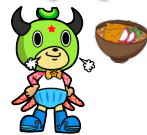


留萌地方本部ニュース



特別号

発行・編集
留萌地方本部
発行責任者
丸岡諒平

2月18日から19日の2日間にかけて、香川県琴平町にて開催された第50回全国青年団結集會に参加してきました。集會には全国各地から500人が集まり、議論と交流が行われました。

今回こうして参加できたのも、急な呼びかけに関わらず、うどんの購入にご協力いただきました各単組の皆様のお力があってのことです。本当にありがとうございます。

琴平町ってどんな所？

開墾地となった香川県琴平町は、人口約9千人の小さな町です。古くから金刀比羅宮の門前町として栄え、町には温泉宿も多数あり、参拝客を中心とした宿場街として有名です。

国の重要文化財に指定されている日本最古の芝居小屋、『金丸座』には全国から毎年多くの有名な歌舞伎役者でにぎわいを見せ、子供からお年寄りまでが楽しめる催しがあります。

残業ありきの生活

一日目に行われた職場シヨットリレーでは、香川県実行委員会の仲間が、自分の仕事についての実態を話してくれました。その中でも私の印象に残っているのは、高松琴平電気鉄道に勤めている方のある一日の宿泊勤務の話です。

電車の運転士であるKさんは、一日目の昼から出勤し、翌日の昼まで勤務するという24時間勤務を行っています。往復の運転を繰り返して、営業所内の詰め所で休憩。その繰り返しです。ゆつくり夕食を食べる時間もなく、30分ほどで済ませているそうです。

さらに睡眠時間は4時間、11時半に就寝して、起きるのは早朝5時

半です。

しかしこれだけハードな仕事をしているにも関わらず、基本給が少ないため、職場の仲間たちは自分から進んで残業をせざるを得ません。ほとんどの職員が月50時間以上残業を行っており、その残業代込みでやっと一月の支出を賄える。という状況でした。

さらに、休暇申請は受付簿式となっており、残業を多く行っている人が優先されるため、名簿からあふれた場合は休みが先延ばしになるなど、過酷な職場実態が報告されました。



構成詩

構成詩では、香川県の自治体職場における宿日直業務の厳しい実態を、青年女性の視点から訴えました。

ある役場では、人員不足から宿直業務を職員が行っており、それが職員の負担となっていました。「若いから大丈夫だろう」という理由で先輩から宿直を押し付けられ、自分たちも宿直の手当てに頼らざるを得ないために断ることができず、連続の宿直となってしまう。たとえ女性であろうと1人で宿直対応を余儀なくされていました。

この状況を問題と考えた町職の青年部、女性部は、宿日直廃止と若手の賃金改善の2つを当局へ要求することになりました。

しかし当局は「募集がない」「財源がない」などの理由で一方的に交渉を打ち切り、何も改善しようとしないうちに当局の姿勢が明らかになりました。



分散会

分散会では座長を務めました。私のグループは自治労5名、私鉄2名の計7名で、それぞれ持ち寄ったアンケートを基に話を進めていきました。

道外の方との分散会は初めてでしたが、どの職場も若手職員は賃金が少なく、「趣味をガマンしている」「このままだと将来は共働きじゃないと無理」など不安を抱えています。自治労の仲間（保育士）からは、日中は子どもの相手をしなければならず、人数不足から時間内には自分の仕事ができずに、例え個人情報を含むものでもやむを得ず自宅へ持ち帰ってするしかない、休暇を取ったとしても、いつ上司から連絡があるかわからず、自宅にいても心が休まらないといった悩みが共有されました。

全体を通じて...

初めての団結集會に参加となりましたが、得る物の多い結果となったとなりました。

特に賃金に関してですが、私は現在実家暮らしのため、正直さほど今の賃金に不満はない方だったのですが、「賃金に対して関心のない仲間たちが増えてきている」という話を聞き、自分も将来の見通しが甘い一人なのだと思惑しました。

仲間の苦労や不安をただ「大変なんだな」という一言で終わらせず、自分の事に思えるように、これからも活動していこうと思います。

全国には皆さんと同じ悩みを抱えた仲間がいます。自分だけの問題と思わず仲間と問題を共有し、これからも諦めずに声を上げていきましょう！

フォトコーナー

